新潮文庫

停年退職

源氏鶏太著

新潮社

停年退職

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草118K

昭和四十年三月三十日 発行
昭和五十一年四月五日 十五刷

著者 源氏鶏太

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊥ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社
© Keita Genji 1965 Printed in Japan

新潮文庫

停年退職

源氏鶏太著

1673

目次

停年待ち……七
ある停年退職者……二九
おすし……六五
課長……九七
酒場……一二九
社員食堂……一三八
土曜日……二七九
趣味と実益……三四七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

幸福について……三八二
ある結末……四五四
参事室勤務……五七〇
夕陽を美しく……六三八
解説　小松伸六

停年退職

停年待ち

「君、血圧は？」
「ちょっと、高いんだよ」
「いくらあるんだね」
「上が百七十で、下が九十八。君は？」
「僕は、まァまァだよ。そのかわり、どうも胃の方が、近ごろ、重苦しいような気がして」
「癌じゃァないんだろうな」
「よしてくれよ、縁起でもない」
「もちろん。だが、それだったら早く診てもらっておいた方がいいよ」
「うん……」
「あのタコを覚えているだろう？」
「ああ、勉強の出来なかった奴。しょっちゅう教室で立たされていた？」
「そう。あの男が三年前に亡くなったのは、癌だったらしいんだ」
「そうか……」
矢沢章太郎は、聞いていて、

（俺には、血圧の心配はないし、それに、癌の心配だってないようだ）
と、思っていた。
別のところで、
「近ごろ、ゴルフを熱心にやっているという噂だが」
「あんな面白いものは、世の中にないからね」
「そんなに？」
「そう。酒よりも、女よりも。接待にも役立つし、第一、健康にいいからね」
「らしいな。ハンディは、いくつになった？」
「二十二だ」
「二十二というのは、うまいのかい？」
「でもないが、この年で、しかも、二年前から始めたんだから、相当なもんだよ。君も、始めたら？」
「始めたいんだが、金と暇がたいへんだろう？」
「なに、始めてみれば、なんとかなるもんだよ」
「では、近いうちに、君から手ほどきを受けようか」
「いいとも」
矢沢章太郎は、聞いていて、
（俺は、ゴルフどころではないんだぞ）
と、思っていた。

さらに、別のところで、

「僕ンとこの息子、来年大学を卒業するんだが、いいところがあったら世話してくれないだろうか」

「そうだなァ。それより、僕の娘は、もう二十三になるんだよ。いいお婿さんがあったらよろしく頼む」

「二十三にもなって、まだ、恋人がないのか」

「と、僕は、思っているんだが」

「案外、知らぬは親ばかりかもわからないな」

「かも知れない」

矢沢章太郎は、自分の子供たちのことを思い出していた。細君には、五年前に先立たれたのだが、のぼると章一の二人の子供がある。章一は、高校生だが、のぼるの方は、二年前に高校を卒業して、今では会社勤めをしている。しかし、のぼるに恋人があるかどうかは、章太郎は、まだ知っていなかった。

「あと一人、長岡君だけだなァ」

一人が、待ちくたびれたようにいうと、別の一人が、思い出したようにいった。

「そうそう、長岡君は、今日で、会社を停年退職になるんだといっていたよ」

どちらかといえば、それまでは、気楽な空気がこの部屋に流れていたのである。が、とたんに、さっと重苦しいものに一変したようであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（停年退職……）

矢沢章太郎は、それとなく唇を噛みしめた。他人事ではないのである。章太郎自身の停年退職の日が、半年後に迫っていた。ために、ここ二、三年は、停年退職という言葉を、しょっちゅう頭の上にのせているような生活をして来ていたのであった。さっきからだって、絶えずそのことを念頭におきながら、人々の話を聞いていたのだ。

しかし、そういう思いは、章太郎だけではなかったはずである。ここに集まっているおよそ十人のうちの過半数は、口にこそ出さなかったが、章太郎とおんなじであったに違いない。

新宿のすし屋の二階であった。会費千五百円で、同窓会が開かれようとしているのである。三十数年前に、北陸のT市の商業学校を卒業し、目下、在京している連中ばかりの集まりなのだ。数年前から年に一回は、開かれることになっていた。

こうやって集まってみると、たのしいには違いないが、同時に三十数年間という歳月は、なみたいていでなかったということが、あらためて考えさせられるような会であった。かつての秀才は、いまだに課長でいるのに、それほどでなかった男が、重役にまでのし上がっていたりしている。かと思えば、株屋の歩合外交員になっていたり、ブローカーになっていたり、している。顔つきだって、よく見れば、昔の面影を残しているが、しかし、重役になっている男には、それ相応の貫禄がしぜんにそなわり、課長は、やっぱり、課長顔で、ブローカーになっている男には、どうながめても、サラリーマンらしいところがない。

いったい、三十数年前に、だれが今日の結果を予想したろうか。しかし、ひるがえって思えば、それぞれが落ちつくところへ落ちついたようだともいえるのである。一人一人に、運不運が

つきまとっていたであろうが、しかし、世の中とは、それほど不公平でなかったとの感慨もわいて来そうであった。

矢沢章太郎は、東亜化学工業株式会社の厚生課長なのである。T市の商業学校を卒業すると、同じT市の高等商業に入り、卒業後、直ちに東亜化学工業に入社し、今日に至っているのだった。

東亜化学工業は、資本金十億円で、従業員も千人を超している。その中での課長なのである。七年も前から課長をしているのであった。七年前に、この分では部長になれ、さらに、取締役部長にもなれるのではないか、との夢を見た。取締役になれたら、停年が五年間延長され、六十歳まで勤めていられるのである。が、その夢はすでに絶望と決っていた。あと半年間で、サラリーマン生活に終止符を打つべく運命づけられていた。

およそ十人のうち、さっきまで、血圧やゴルフのことを話していたうちの二人は、ともに重役になっているから、目下のところ、停年には無関心のようだ。そして、歩合外交員とブローカーになっている二人も。あとの六人ぐらいが、だいたい同じ年だし、停年ということに、最大の関心を寄せているに違いなかった。

「そうか、長岡君は、今日で、停年退職になるのか」

一人が感慨深げにいった。

「だから、ちょっとぐらい遅れるかもわからない、といっていた」

「では、先に始めていようか」

一人が腕時計を見て、

「まだ、六時十五分だ。半まで、待ってやろうじゃァないか」
だれにも、異議がないようだった。
しばらくたって、別の一人が、
「停年退職か……。それから第二の人生が始まるのだと思えばいいというけれども、とてもとてもそんな気になれないからな」
と、やや自嘲的にいうと、
「そうだよ。退職慰労金の千万円もくれるんなら別だが、僕の会社なんか、二百五十万円ぐらいなんだからな」
「それから税金を引かれる」
「いくらぐらい引かれる？」
「君の場合なら十万円ぐらいだろうな」
「残り二百四十万円か。僕ンとこは、三人の子供が、まだ一人前になっていないし、どうしても月に四万円いるんだ」
「六十カ月、五年間だな」
「そのあと、いったい、どうしてくれる？」
「そんなこと、僕にいったってしようがないよ」
「しかしね。僕は、停年退職のことを思うと、妙に人にからみつきたくなるんだよ。でなかったら、泣きたいほど憂鬱になってくる」
「君だけではないさ」

「すると、君も、か」
「そう」
「安心していていいわけか」
「何事も運命だと思って、な」
「こいつめ、いやに達観しているようなことをいうぞ」
「冗談いうなよ。達観どころか、焦躁の毎日を送っているんだ。一年ほど前から、仕事の方は、二の次にして、次の就職口をさがしまわったり、なんとか、一年でも停年を延期してもらいたいと、やたらと重役に頭をペコペコと下げてみたり、自分ながら情けないもんなんだよ」
「その結果は？」
「さっきもいった通り、何事も運命だと思え、ということだ」
「君でも、やっぱり、そうだったのか」
「だいたい、五十五歳なら働き盛りだよ。その五十五歳で停年というのは、不合理だ。いや、残酷だよ」
「近ごろ、一年延長したり、二、三年だけ、嘱託として残してくれる会社もふえて来ているようだが」
「しかし、ほんの一部だよ、そんな会社は」
「辞めたあと、年金をくれる会社も出来つつある」
「あれがもらえると、ありがたいんだが」
「僕の会社では、組合が動いてくれている。だが、今年の間に合いそうにもない」

「ここにいるうち、何人が今年中に、停年になるんだ」

五人が今年中にで、一人が来年ということがわかった。お互いに顔を見合わせて、苦笑した。

まるで、人生の敗残者たちのようだ。そんなはずがないし、あってもならないのだが、実際には、そういう劣等感を持て余しているのであった。

矢沢章太郎は、さっきからどちらかといえば、聞き役にまわっていた。といって、いいたいことがないわけでは、ない。いっぱいあるのだ。が、それをこの席でいってみたところで、どうにもなるものでないと知っているからであった。

章太郎の胸算用では、退職慰労金は、三百万円ぐらいもらえるはずであった。そのほかに、百万円ぐらいの貯金がしてある。合計四百万円。が、四百万円では、この先、何年生きるかわからないのだし、高校生の息子には、ぜひ大学を卒業させてやりたいし、あれこれ、心細いのだ。娘にだって、人並の嫁入り仕度がしてやりたい。母親のない娘だけに、いっそうのふびんがかかるのであった。

（あと三年といいたいのだが、せめて、あと一年でも働きたい）

あと一年間、収入があるということは、プラスマイナスで、ばかにならないのである。そして、その一年の間に、もっと必死になって、次の就職口をさがしてまわることなのだ。

章太郎が、この一年間、次の就職口さがしにそれほど熱心でなかった理由の一つは、もしかしたら、あと一、二年、今の会社に残れるかもわからぬというあてがあったからだった。めったにないことなのだが、しかし、そういう例が皆無ではなかった。昨年、停年になった男が、特に会

社において必要な人物だとして、二年間だけ嘱託として残っている。

章太郎は、自分自身が、会社において特に必要な人物だ、といい切れる自信はなかった。そうのような気もするし、そうでないような気もする。しかし、二年間嘱託勤務を許された男にしたところで、似たようなものであったのだ。結局は、重役のハラ一つ、ということらしいのである。

（それなら、俺だって……）

章太郎は、そう思いたいのであった。そして、そう思う心の底には、同期に入りながら、今は、常務取締役としてときめいている相原安夫をあてにするものがなかったとはいい切れないであろう。

もっとも、章太郎は、そのことについて、一度も相原常務取締役に頭を下げていないのである。それとなく、ほのめかしたことはあるが。一方は、大学出、こちらは、高商出。そこにはじめから差がついていたけれども、一応は、出世を競った間柄なのである。結局、三十年の間に、常務と課長というような大差がついてしまったが、章太郎の方が普通で、相原は、抜群の出世をしたことになる。そのくせ、章太郎は、相原の実力については、どうしても認められないのであった。ただし、これは章太郎のひがみ心のせいであったかもわからない。

相原が、もし、自分のために強く発言してくれたら、あるいは、一、二年間の嘱託勤務も可能のような気がしていた。章太郎は、相原には、頭を下げたくなかったが、相原の方で、勝手にそのようにはからってくれないものかと、虫のいいことを考えているのだった。

しかし、今は、そんな虫のいいことを考えてばかりいられなくなっていた。何故なら、昨年、嘱託勤務を許された男に、その内示があったのは、停年の日の半カ年前だと聞いている。とすれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com